

します。

(兵庫県 芦田 史朗)

私の戦争体験記

鳥取県 原中 宣夫

(旧姓 森高)

終戦

昭和二十(一九四五)年五月二十二日、満十九歳。繰り上げ徴集により満州国黒河省璦琿第六国境守備隊に現役入隊し、二カ月余りの初年兵教育が終わり、璦琿の南西約五十キロメートル先地点にある二站の野戦陣地で、ソ連を「仮想敵国」として散兵壕、対戦車壕掘り等、陣地の構築作業をしていた。ある日、「ソ連軍が侵攻してきたので直ちに陣地に戻って守備に当たれ」と命令があり、慌ただしく野営地を後に夜行軍に移った。途中、不気味に空を焦がす火の手が数カ所から上が

るのを見ながら異常な緊迫感に包まれ、休む間もなく歩き通し、ようやく陣地西口に着いたのは昭和二十年八月十五日朝方だった。

東山陣地へ到着した第一中隊は、その主力を東山陣地中支点及び左支点到置き、その他は右支点到に配置された。私はこの右支点的の配備について。このとき私が手にした兵器は、三八式歩兵銃と木箱型の対戦車攻撃用急造爆雷であった。帯剣も鉄帽もなく、戦闘帽をかぶった何とも奇妙な戦場の姿であった。これは急増爆雷を使う「肉弾要員」なのだと、ひそかに覚悟を決めていた。しかし、それを使う機会は一度もなかった。幸運と言うべきか。

八月十七日、両軍の砲撃が次第に激しくなり、北東方向から多数の戦車に従いソ連軍が押し寄せ、やがて右支点先端部守備の我々(赤木班長以下五人)の正面にも、対戦車壕を越えて次々とソ連軍が斜面を攻め登ってきた。「撃て」の号令を合図に射撃を開始し、耳元を掠める弾丸の音に一

瞬首をすくめながらも無我夢中で撃ちまくり、ふと我に返ったときは右支点正面の本隊に合流していた。敵を本隊正面に誘導して攻撃を加えようとした我々の作戦は実らなかった。

東山陣地中支点、左支点の方角ではこの後も激しい銃砲声が聞こえ、熾烈な戦いが続いていたが、右支点における交戦はなく、戦闘は一時間余りでやんだ。右支点におけるこの戦闘で、戦闘後の壕内点検中に狙撃兵に狙われたらしい赤木班長の戦死があったことは残念である。

八月二十一日、前日までの激しい砲撃もやみ、朝から辺りは静まり返っていた。しばらくして谷を隔てた東山陣地中支点の先端部が突然大爆発し、続いて二度目の爆発があり、次々とソ連兵が撤退して行くので、これはおかしい、彼らは逃げるのか、一瞬勝ったのではないかと思った。

ほどなくして「日本軍は無条件降伏した。各自本隊に合流せよ」と連絡があり、にわかには信じられなかったが、ソ連兵の撤退といい、あたりの

静けさといい、理由はこれだったのかとわかり、日本の負けかと思うと悔しかった。しかし反面何かほっとして、張り詰めていた緊張が一気に解ける気がしたのもまた事実であった。

本隊に合流し中隊長から「部隊は今後、ソ連軍の指揮下に入り武装解除を受ける」と指示があり、夕方近く陣地を出て陡溝子においてソ連軍により一切の武器・兵器を取り上げられて武装解除され、ソ連軍兵士の監視のもとに近くの草原に野営し、翌日集結地、孫呉に向かって出発した。

停戦を知り東山陣地中支点の本隊に復帰して目にしたものは、一面山肌はえぐられ、草木一本見当たらない荒れ果てた壮絶な戦場の様相だった。多数の戦死者もあったと聞き、ただ息をのむばかりであった。私の守っていた右支点と谷一つ隔てたこの場所の戦いは、このようにまで激しいものだったのかと、今さらながら驚くほかなかった。武装解除に向かう道の両側の美しかった夏山も戦火に焼かれ、一面戦車に踏みしだかれ、無惨な姿

となっており、ここでも多くの犠牲者のあつた激戦がうかがわれ、あと一日、二日このような激しい攻撃を受けていたなら、恐らく日本軍は全滅したであろうと思われ、悲惨な戦争の現実を目の当たりにして慄然とするばかりであつた。

「一体この戦争は何だつたのか」言いようのない空しさ、やり場のない憤り、大きな疑問を残して短いこの戦争は終わった。北鎮台の戦場を去るに当たっては、ただこの戦いに散つた多くの人々のご冥福を祈るしかなかつた。

ここでソ連軍の進攻を阻止、果敢に戦つた味方、そして散つた多くの兵士のあつたことを永久に忘れてはならない。

孫呉に着いた部隊は、ある多数の社宅風な建物の並ぶ大きなブロック内に分宿し、ソ連警護兵の監視の下に全く新しい生活を始めた。

ここでの生活は軍隊の組織そのままであつたが、軍隊時代のような厳しい規律もなく、時折様々な使役の割り当てがあり、ほとんど初年兵の

我々が駆り出されていたものの、食料は米や乾麵包、牛缶の他、味噌、醬油、野菜、肉の乾燥食品等、陣地から持ち出してきたものがあり、比較的自由に、ある面では気楽に生活していた。

使役には、もちろんソ連の警護兵つきであるが、駅に集積してある物質（主として大豆、小麦等穀類）の積み込み作業や、近くの山の糧秣庫からの米、乾麵包、牛缶などの食料品の運搬等の雑役が多かつた。積み込みした物資はどこへ運ぶのかわからなかつたが、山から運搬してきた食料品は日本軍に再配分されるということであつた。

山の糧秣庫の使役は自分用のものを確保するのに好都合で、たばこ、砂糖、甘味品等を重点に狙い、乾麵包の袋の中の「金平糖」漁りは楽しみでもあり、ソ連警備兵の目を盗んでは持ち帰つていた。

これらは後に、一カ月にも及ぶシベリア流浪の旅ではなかなか重宝することになった。敗戦といういまだかつてない運命にさらされて一体いつま

でここに留められるのか、どうなるのか、軍事捕虜とはどんなことになるのか、いつ帰れるのか、不安でいっぱいではあったが、若さと、厳しい軍隊生活からの解放感と、何よりも戦陣訓の捕虜ではなく、自分一人ではない、大勢の人々と一緒にあるという安心感があり、割合に気楽な思いで過ごしていた。

使役に出るとき以外はブロックの囲いの外へ出ることはなかったので、ソ連警護兵の姿も余り見ることとはなく、地区全体、特に混乱もなく比較的静かな生活が続いていた。

流浪の旅

九月初め頃になりいろいろな噂話が出てきて喜んで、がっかりしたりしていたが、瓊瑋部隊は新たに千人の作業大隊に再編成された。私は第十作業大隊に編入され、ここではっきり「シベリア行き」を告げられた。

帰国の夢は少し遠くなったが消えた訳でもない

と勝手に期待を膨らませて、シベリア流浪の旅へと一歩を踏み出していった。

孫呉を出発し、どこをどう歩いたか記憶はないが、数日歩いて黒龍江岸に着いた。そこはソ連軍侵攻の基地となっていたらしく、各種の武器、弾薬が兩岸に多数集積されていた。これらを運んだと見られる大きな筏で我々は対岸のソ連領へ渡河させられて、その付近に何日か野営し、武器弾薬等整理の使役に当たられた。

ここに滞在中、裸にさせられ、頭や局部等体じゅう白い粉剤を噴射され、衣服を着けてその上からも噴射されて真っ白になった。これが初めて経験するシラミ退治の始まりであった。

何日かたち、当てのない（シベリアへ行くのだけ告げられていた）行軍が始まり、馬鈴薯掘り、人参収穫等の作業をしながら、時には農場や牧場等の大きな建物に泊まることもあったが、千人もの部隊が泊まれるところは少なく、大抵は野宿で村々を回り行軍を続けていた。

第十九捕虜收容所

十月に入り朝夕肌寒さを感じるようになった頃、列車が走り、工場らしい高い煙突が立ち、多くの建物が並ぶ街を望む高台に着いた。そこは既に先着の部隊が野営しており、水道が引かれて水汲み場が造られていた。我々も隣り合わせて野営することとなった。

ここは水道施設があつて、電灯が灯る街であつた。久方ぶりに見る街の明かりは、長いさすらいの旅に歩き疲れた身には微かな安らぎを覚えさせてくれた。ここで初めて行軍の最終目的地がこの地であり、この捕虜收容所に入所することが明かされた。帰国にかけていた一縷の望みはここで完全に断たれてしまった。

收容所は、高い塀に囲まれた広大な区画の要所、要所に望楼があり、銃を持った兵士が監視し、「第十九捕虜收容所」と呼ばれていた。

アムール州ライチハ市（今はライチヒンスク市と呼ばれている）にあつて、入所したのは昭和二十

十年十月十日のことであつた。

この收容所には二段式で板場のベッドが設けられ、宿舍として使用できるようになった多くの既設の建物があつたが、我々第十作業大隊は先着部隊により設備されたと思われる幕舎に入り、しばらくは宿舍の環境整備などをしていた。

その間の食事は、所内各部隊共同の大きな炊事場で炊事が行われ、朝夕の食事は部隊ごと飯上げで各隊に持ち帰って分配していた。

当然のことながら、飯上げ当番は我々初年兵の仕事である。内容は高粱^{コリアン}、粟、大豆、燕麦などの穀物に、わずかの魚か肉の混じった雑炊が多く、その濃淡に一喜一憂した飯上げであつた。

この頃の昼食は、黒パンを朝の飯上げのときに天幕に包んで持ち帰り分配していた。三百五十グラムでは大抵昼までもつことはなかった。

そのうち作業に出ることになった。行く先は炭鉱である。ライチハの炭鉱は露天掘りで、街の四方に広がっていた。そのうちの一つ、收容所の南

部に広がるトーキンスキーと呼ばれる炭鉱で作業は始まった。

作業は、丘陵地帯原野の表土を巨大な電気ショベルが取り除き、その下に現れた炭層表面の清掃作業で、板もっこを使い二人一組で炭層表面の残土を運搬除去するのである。作業そのものは至って単純なものだが、空きっ腹抱えての作業では仕事がかどるはずもなく、休み休みで仕事をすれば、現場監督は「ダワイ、ダワイ」とせき立て、警護兵までが「ダワイ、ダワイ」と追いついて来る始末、仕方なく嫌々仕事を続けるしかなかった。加えて、古年次兵達は我関せずと焚き火のお守りばかり。ここでも初年兵の悲哀は続いていた。初めて「ダワイ、ダワイ」の言葉と、その意味を知った。最初に覚えたロシア語であった。

こうして毎日同じように「ダワイ、ダワイ」の繰り返しで炭鉱作業が続いていった。

満州で二冬を体験してはいるのだが、この地の寒さはわからず、格別防寒準備があるでもなかつ

たので、手持ちのもので間に合わすしかないという覚悟を決めていた。各自の所持する冬物の被服類調査もあったが、一向に補給されることもなく、わずかに手套が支給されて、ないよりはましと少しは助かった気がした。

作業場帰りにはみんな、石炭の塊を両脇に抱えて帰った。幕舎に一つあるドラム缶ストーブの燃料である。冬ごもりには幾らあっても多過ぎることとはなかった。石炭は結構重かったが、皆我慢して持ち帰った。時には厳しい監督もいて、炭鉱の出口で全部置いて行かせられることもあったが、大抵は大めに見てくれていた。

次第に寒気が厳しくなるに従い、食糧不足と慣れぬ労働、そして帰る当てのない失望感に、気力、体力は衰える一方で、体調不良を感じるようになってきたが、ここで落ち込んでしまつては帰ることはできない、倒れてはだめだ、何としても元気でいなければ、とにかく帰国したい、帰りたいの一心で、気力を振り絞り無我夢中、慣れぬ炭

鉦作業と最初の冬を耐えていた。

入院

年が変わった頃、高熱と咳が続いて治まらず、「気管支炎」と診断され入院することとなった。風邪をこじらしたものらしかった。

病院は収容所内であって、何かの建物を転用したものらしかったが、ともかく日本の軍医がおり、病室にはベッドが並び、日本人の衛生兵がおり、病院特有の消毒薬の匂いがあるこの場所は、何となく安心感があった。少なくとも休める、休養ができるということが単純にうれしかった。萎えかけた心は大いに救われた。

病室は私が入って十人くらいで満室となった。他の患者に気兼ねするほどの余裕もなく、激しい咳は一向に治まらず続いていた。薬を与えられ休養するうち、次第に回復してきた。病人食は高粱や粟等の雑炊の作業食と違って白米に鮭等の混じった雑炊で、白パンもあり、量は少なかつた

が、日本人の患者にとってにはありがたい食事であった。投薬と食事が適切であったのか、それとも休養がよかったのか、一カ月余りの療養で退院も間近になるまで回復していった。

私はここで、親しかった同年兵のA君の死を知った。栄養失調症だったという。ほかにも無念の涙をのんで逝った多くの人があったことを聞かされ、またしても「なぜ、何のために」という疑問は解けず、かつて戦場を去るときと同じ空しさ、やり場のない新たな憤りをどうすることもできなかつた。ただご冥福を祈るしかなかつた。

退院の間近になっていた私は、思わぬ皮膚病「疥癬」に取りつかれ、体のあちこちに黒い塗り薬を塗られて治療する羽目になった。当時、所内では疥癬症が蔓延しており、病院付属の建物内にこの患者を隔離して治療する「疥癬中隊」と称する治療所が設けられていた。「疥癬」と診断された私もここへ隔離された。その数ははっきりとは覚えていないが、体育館のような広い建物いっぱい

いに寝起きしていたので、相当な数ではあった。

治療は毎日、担当の衛生兵に患部へ黒い軟膏（薬名はテールー膏とか言った）を塗ってもらい、数日おきに病院付属の浴場（浴槽のない広い洗い場に、数組の湯と水の出る蛇口が設けてある）で体を流して清潔を保つだけのものであった。

ここでは、軟膏や患部の分泌物で極端に汚れたものは、適宜清潔なものに取り替えられたので、洗濯しなくてもよく、大いに助かった。ここに隔離された患者は所内各隊から来ていた関係からか、あるいは初年兵と年配者がほとんどで階級も下級者が多かったせいとか、お互い心安く「さん」付けで呼び合い、治療の傍ら、時折所内の雑役の使役に出るほかは、多く郷里や戦闘中の話等をしながら気楽に過ごしていた。

こうして辛い炭鉱作業の厳寒期は、途中で入院、軽作業、疥癬治療と続いたので、ほどよい休養になったのか、体力も回復して、二年目も何とか半年が過ぎた。

この後、帰国するまでに病氣と怪我で二度の入院をした。疥癬治療を終えて再び炭鉱作業に出始めて間もない頃、作業出発直前に激しい腹痛と発熱に襲われたので、班長に作業休みを申し出て、医務室で日本の軍医（運よくこの日の当直は日本の軍医であった）の診察を受けたところ、「直ちに入院して検査する必要がある」と言われ、二度目の入院となった。

入院後は早速検便の後、すぐに個室に入れられたので少々不安になっていた。医師はロシア人の一見やさしそうな女性軍医であった。多少腹痛は治まってきたものの、下痢は相変わらずで熱も引かず、薬を飲んでも一向に治まらず、食欲などはどこへやら、頑固な下痢に閉口していた。一日たち二日たってもなかなか熱も下がらず、下痢はとまらず、果ては血便様なものにならざり、軍医も首をかしげる始末で、もしやこのまま……等と一人個室で心細い思いをしていた。数日後たつてようやく熱も下がり、食欲も出て普通に戻ったと

き、「峠を越した」と言われ、初めて一時は危険な状態に陥っていたのだと知った。

「もしや発疹チフス等の伝染病か何か」と、尋ねてみたが、教えるはもらえなかった。その疑いであったことは確からしく、この後も一人個室に隔離されたまま二十日余りを過ごして退院し、作業に復帰した。心細かった個室で、衛生兵の手厚い看護と親切は身に沁みてありがたく、感謝のほかなし。

三回目の冬を越した年の夏の終わり頃、今度は怪我で入院することになった。

貨車の材木卸しを終えて降りたとき、つまずいて打った右足の「向こうずね」が痛くて歩けず、作業を休んでいたが、次第にはれ上がり、ますます痛みもひどくなり、消灯近くになっていよいよ我慢も限界となったため、特に緊急診察をしてもらうことになり、同僚O君の肩にすがり医務室に行ったところ、余りに大きくはれ上がってズボンが脱げないほどの様子に軍医も驚き、またもや直

ちに入院して切開手術だと言われ、そのままO君に助けられて入院、早速切開手術を受けた。

手術の担当は医務室で診察を受けた日本の軍医だった。麻酔は切開部分に冷たい液体が注がれ、次第に感覚を失っていき、僅かに冷たさを感じるようになった頃、切開された。その様子は見ることはできなかったが、後で見せられたのは、おびただしい血腫と筋肉が切れて骨が見える深い傷口であった。

傷口にガーゼを詰められ、包帯を巻き、処置が終わった頃は日付が変わっていた。

「もう少しで大変なことになるところだった、早くてよかった、もう大丈夫だ」と言われ、それほどの重傷とは思っていなかったので一瞬驚いたが、安心してしばらく痛さを忘れていた。

翌日は作業があるのに同僚O君は、宿舎から医務室、病院へと親切に付き添い、励ましてくれた。あのときのありがたさは今も忘れない。

民主化運動と民主主義突撃隊

疥癬治療から帰った頃の本隊は、幕舎から半地下式の建物（洞窟と呼んでいた）に移住していた。この建物は、ここへ来る途中よく目にした馬鈴薯の貯蔵庫に似ており、先着部隊によって建設されたものだった。以来この洞窟宿舎で二冬を過ごし、後に普通の建物の宿舎に移った。ベッドとは程遠く、洞窟宿舎と同じ二段式の板場が寢床の宿舎であったが、昼間の窓の明かり、電灯の明かりも明るく、今までのどこよりもよい宿舎に思えた。そしてまた冬を越し、その夏帰国するまでこの宿舎で過ごした。

最初の厳寒期が過ぎ、収容所の各施設の整備も進み、生活にも作業にもなれて落ちつき、朝夕の食事も食堂でするようになってきたころ、「日本新聞友の会運動」が始まり、所内の民主化が叫ばれ、

階級意識に目覚めよ！

封建性を打破せよ！

天皇制の打倒！

等と言って、教育勅語で育った我々にはなじめない啓蒙活動が活発に展開されていた。その中心になっていたのがH委員長で、新たに反ファシスト委員会なるものを立ち上げ、第十九地区委員長としてその権力を一手に握り、「十九地区のH天皇」と恐れられていた。

しかし、おごるなんとかのたとえ通り、間もなくH委員長はその行き過ぎた指導方針のため、あるいは何らかの不正があったのか、H委員長一派は批判追及を受けて失脚し追放された。

かわって新たな組織「民主主義委員会」が、若手グループの青年行動隊が中心になり、作業班長はもとより、大隊長、中隊長などの全ポストを占め、収容所日本人捕虜の組織を掌握運営するに至り、軍隊の階級組織は完全に消えた。人々は一時的に「さん」付けで呼び合っていたが、この後は「同志、同志」と呼び合い、ますます運動は活発化していった。

我々軍隊の下級者にとり、軍隊組織がなくなることは大いに歓迎するところであったが、一難去ってまた一難、階級闘争という重圧が加わることになり、いささか閉口ではあった。余暇には、当然のことながら「日本新聞」の輪読会、政治研究会、批判会等々、各種の集會に駆り立てられた。この頃にはもはや好むと好まざるとにかかわらず、すべてが民主運動にかかわりを持つしか選択肢はなかった。

反抗はもちろん、非協力、無関心、無気力すら反動として批判追及の的にされ、吊るし上げられた。将校（かつて無慈悲な取扱いをしてきた者は特にひどく）、憲兵、特務機関員等であった人たちは、日本帝国主義の手先だったとして格好の対象とされた。（この後、将校、憲兵、特務機関員等は、収容所の一隅の建物を新たな塙で囲み、一時ここへ収容されていたが、他へ移された）

民主運動の高まりとともに生産意識も向上し、所内では「民主主義突撃隊」という新しい作

業班結成の機運が盛り上がり、第一民主主義突撃隊に続いて、第二民主主義突撃隊が編成された。

一二〇、一三〇パーセントと作業成績を上げ、給与もよくなり、ますます高いノルマ遂行を果たすようになっていた。

このまま今の作業班にいても、少しは民主的となったとはいえ、初年兵はいつまでたっても初年兵、両方からの圧力はもうご免だ、どうせ苦勞して働かねばならないのなら、落ち込んで弱るより、面白く前向きに働くことのほうがまだ、それには突撃隊で苦勞した方が苦勞のやりがいがあるのではと考えていた。

第十大隊における突撃隊の隊員募集が始まったのを機に応募、隊員となった。

二十一年十一月頃、二十代の若者を主体に、数人の年配者をまじえ、三十余名をもって「第六民主主義突撃隊」は、若者頭の元下士官を隊長に選び編成された。年配の人達は大工職、鳶職、農業、通訳等いろいろだったが、みんな「まだまだ

若い者には負けんぞ」と、なかなか気迫に満ちた人達だった。

このうち通訳の人は最高齢、大学のロシア語科出身の意欲旺盛なベテラン通訳で、心強い味方であつた。

「第六民主主義突撃隊」の新しい作業場は、ライチハの東方にある炭鉱（東炭鉱と呼んでいた）で、露天掘りの表土廃棄場の線路を移動する作業で、移動した線路の枕木の下、間に土を入れ安定させていくものだった。初めはなかなか能率よくいかずパーセントを上げるのに苦労したが、ポイントさえつかめば案外簡単にできる作業であつた。

第六民主主義突撃隊の作業は滑り出しよく、次々と一二〇、一三〇パーセントの作業成績を挙げていったので、優秀作業班と認められたのか、増食、被服の優先支給、作業の行き帰り、作業中とも警護兵なし（ビスカン）となる等、いろいろと処遇が変わってよくなつてきた。

「生産向上こそソ同盟を強化し云々」等思つて働いたわけではなかったが、働くことで少しでも待遇がよくなればそれでよかつた。

理論ばかりでは腹の足しにはならぬ、生きて元気で帰るために稼ぐ、それがここで生きるための支えであつた。

こうして第六民主主義突撃隊は二度目の冬を越し、夏頃に作業場が変わつた。今度の作業場は「オテース」と言い、コルホーズ、ソフホーズ向けの各種資材、器材、糧秣等を扱う基地となつているところで、構内の引き込み線に到着する物資の貨車卸しと、その運搬整理作業が仕事であつた。

この構内には製材所が隣接し、既に第二民主主義突撃隊の作業となつて、ここでも高い成績を挙げていた。

到着物資は、木材、鉄筋、鋼材、釘、セメント等の建設資材。塩、砂糖、燕麥粉（パン粉）、雑穀等の糧秣類。

時には旋盤等機械類もあり、さまざまなもの

で、隣接の製材工場用の木材が大半を占めていた。石炭輸送用の六〇トンの貨車からの木材卸しは、この作業場一番の難作業で重労働であったが、我々は独自の方法によって安全に迅速に、高い作業成績を獲得するようになっていった。

時折、ロシア人労働者と別々の車で同時に作業することがあり、我々を真似てかけ声を掛けているが、リーダーの要領が悪いのか、なかなかうまくいかず、我々がとつくに終わってもまだ済まず、機関車が貨車を引き取りに来てでも終わらないこともあった。こんなときは必ず応援させられた。もちろん、その分は我々の作業量に加えられるにはいたが。

また、ロシア人労働者が行っていたバラ積みセメントの貨車卸しは、二人一組で箱もっこを持って運び卸すものだったが、この仕事は狭い十トン貨車の中で、セメントの埃の中で働かなければならないので敬遠されたらしく、我々が行ってからは我々に回ってきた。我々もそのような悪い環境

の中で仕事をしたくはないので、早くて楽な方法はないかという考え、土木作業用の木製一輪車を使うことを考えて試したところなかなか調子よくいくので案外早く片づいてしまった。彼らの半分以下の時間で終わっていたという。

しかし、この一輪車を使う方法はノルマにないらしく、計算ができないと言ひ、協議の結果、暫定ノルマとして計算したということだった。

このノルマは改められ、ノルマ策定には我々の作業が基になったと聞いて、ノルマとはそんなものかと、いささかあきれもしたが、一方痛快にも思った。間もなく木製一輪車は金属製に切り替えられ一段と能率よくなり、パーセントアップには格好の作業となった。第六民主主義突撃隊はオテースの所長（ナチャールニックと呼んでいた）に認められ、いつしかこの専属作業班になり、材木卸しを繰り返していた。

帰国の始まり

こうしてオテースでこの年を越し、遅いシベリアの春とともにようやくこのラーゲルにも帰国の順番が来て、各作業班に人員が割り当てられた。

大分前から「日本新聞」に他地区の帰国が報じられ、この十九ラーゲルはまだかと待ちに待っていたものの、半数に限定とは残念だったが、第六民主主義突撃隊も作業場で昼の休憩中に全員集会を開き、選ぶこととなった。

まず年配者と作業優秀者数人を推薦し、隊長と通訳（最年長者）を加え十余名を選び、帰国の喜びを聞きながら、残留部隊は次期帰国に望みをかけて、次のM隊長を選んで集会を終えた。私はなお残留隊員の中にあった。

この後、第六民主主義突撃隊は数人の隊員を加え、オテースでさらに一年専属を続け、二十四年六月二十二日、この年最初の帰国命令を受けた。

二十一日、消灯して就寝した直後、突然隊長に起こされ、今から「六突」は隊員半数を選び帰国

者として、直ちに静かに梯団本部に集合すると言われ、隊長、隊内リーダー格二、三人に中隊長を加えて協議し、半数を選び、該当者を起こして帰国することを伝え、梯団本部建物に集合し帰国準備に取りかかった。

ようやく帰国が現実となって嬉しかったが、残る半数の隊員の気持ちを考えると、気の毒ではないような、やるせない思いでいっぱいだったが、数が限定されている以上、やむを得ず次期に期待してもらおうしかなかった。

入浴し、被服（夏用）を交換して服装を整えた後、スターリンに対する感謝文の署名式会場に向かった。

会場には両側に民主委員会の委員たちが並び、中央に白い布を掛けたテーブルがあり、その上に署名簿は置かれていた。「レーニン・スターリンの指導の下に、民主主義者として日本再建に尽くす、その力を与えられたスターリンに感謝する」という。

しかし、感謝はむしろ、大きな犠牲を強いられ、ソ連の戦後復興に多大な貢献をさせられた我々日本人捕虜にこそあるべきと思うのだが、堀の中の民主運動は逆の方向へ仕向けてしまった。

今はただ、勢いに押され、単なる帰国儀式として署名をするしかなかった。

翌日は梯団編成などすべての手続きを終え、払い戻しを受けた賃金の残り分で、四年間の苦闘の証にと時計を買い、後はたばこにかえてこのラーゲルとの別れとした。

この年最初の帰国梯団は、夕方近く第十九地区ラーゲルを出発、ライチハ駅で帰国列車に乗り込んだ。

出発時刻が迫った頃「六突」の残留隊員たちが、新たに選んだO隊長を先頭に、隊旗を掲げて見送りに駆けつけ激励されたので、快く残留を納得してくれたのかと、唯一気にかかっていたことが晴れて、心おきなく出発することができた。彼らの帰国の早からんことを願いながら。

帰国列車は貨車に二段式ベッドをセットしたみすばらしい車両だったが、帰国に胸躍らせていた我々には何にも増して立派に見えた。ライチハを出発して間もなく日が暮れ、帰国道中が始まり、真つ暗な車中にもかかわらず帰国の喜びに満ちた談笑は賑やかに続き、いつしか静かになり、気がついたときは夜が明けていた。

朝日の方へ進んでいたのも、間違いなく東方へ、日本の方へ向かっていることがわかり、改めて嬉しさがこみ上げてきた。

途中何か所か、長時間停車するところがあったので、四昼夜かかってようやく最終集結地のナホトカに着いた。

ナホトカには三カ所の第一、二、三分所と呼ぶ収容所があり、一日ごとにこの分所を移動して帰国手続きを行い、第三分所で完了、乗船を待つと聞かされた。

梯団は、第一、二分所と順調に移動し、最終の第三分所で乗船の順番を待ち、この年の引揚げ第

三船「第一大拓丸」に乗船、懐かしの日本へ向かってナホトカ港を出港した。昭和二十四年六月二十九日であった。

帰郷

三日三晩の日本海、前回新潟港から北朝鮮羅津港へ渡ったときは、冬の荒海ひどく船酔いに苦しんだが、今度は夏の海、少しはましかと思いつつも、まずは寝るが一番と、乗船後はすぐに船室で横になり眠ってしまった。

ナホトカ港を出港して四日目の朝、東舞鶴港に入港上陸し、ようやく日本の地を踏みしめ、帰国したことを実感した。

引揚寮では早速、所持品検査が始まった。被服も含め一切の所持品を広い検査室に残して入浴、その間に検査が行われ、次の部屋で受け取ったときには、被服は着て帰った古い物は全部引き揚げられ、新しい夏服上下、襦袢、袴下、褌、靴等、いずれも新品が用意されていたが、所持品のうち

写真、手帳、文字を書いた紙などは、何も残っていなかった。

次の日は復員証明書等の書類や、金千円也の引揚手当金等を交付されて、東舞鶴駅から帰郷の途についた。

寮内に「留守宅通信」コーナーがあり、記録簿に父から届いている記録があったので受け取って見ると、差出日がちょうどライチハを出発した日と同じ日付だった。偶然ではない何か通い合う不思議な力があるものと驚いた。

私達の前二回の引揚者達の過激な行動が報じられているので、よくよく自重して帰宅せよとの内容であった。義兄と、後に義父と呼ぶ鉄道員のお二人に途中までお出迎えいただいたのも、このための配慮なのか。親心のありがたさは身に沁みる。

留守中、祖母と次兄、三兄の死があったことを知らされた。次兄は南方で戦死、終戦二カ月前だったという。

私の帰還を誰よりも待ち喜んだのは母だった。私の引揚げとともに母の引揚げも終わった。その母も私の姓が変わり、結婚し、就職した私の姿を目にして、その二年後にこの世を去った。

六年ぶりに我が家へ帰り、昭和二十四年七月四日、米子市役所に復員届を提出し、四年間の私の兵役が終わった。

兄嫁、甥、姪

昭和二十年五月二十二日 満州国黒河省 瓊瑋第

六国境守備隊、現役入

隊、第一中隊配属

十九歳繰り上げ徴集

昭和二十年七月十日 独立歩兵第七九五大隊

第一中隊配属

【執筆者の紹介】

住 所 鳥取県米子市西福原

生年月日 大正十五年二月二十八日

昭和十七年十二月十七日 鳥取県立日野農林学校

卒業

昭和十八年一月一日 満州拓植公社採用

昭和十八年二月一日 満州国北安省北安街

満州拓植公社北安地方

事務所配属、着任

家族構成 農家、父 銀行員、祖母、母、長兄、

終戦抑留

昭和二十年八月二十二日 終戦、武装解除

昭和二十年九月十八日 孫呉出発

昭和二十年十月十日 ライチハ十九収容所入

所

昭和二十四年六月二十二日 ライチハ十九収容所

出発

昭和二十四年六月二十九日 ナホトカ港出港

昭和二十四年七月二日 東舞鶴入港上陸

昭和二十四年七月四日 復員

復員後

昭和二十五年一月一日 米子郵便局勤務

昭和五十九年六月三十日 米子郵便局退職

昭和五十九年七月一日 簡保協会事業受託

平成十二年四月三十日 簡保協会事業受託終了

(鳥取県 井上 万吉男)

シベリア抑留の記

鳥取県 加藤 一郎

終戦の詔勅を聞いて「これで無事日本に帰って、家族揃って」と希望を抱き、または将来に大きな夢を描いた青年達が四万人、シベリアの過酷な労働条件の中で帰国を果たすことなく、シベリアの土になってしまった。

私が強制収容所に入れられたのはいつか定かではありません、何ぶん五十七年も昔のことですから。舞鶴復員局に提出した身上申告書によれば、

一九四五年九月二十七日に奉天（瀋陽）で大隊編成をして出発している。そして一九四九年九月二十四日舞鶴に上陸し、同月二十八日に復員をしているので、丸四年間の抑留生活であった。

奉天を出発して、新京（現在の長春）、ハルピンを経由して黒河に着いたが、この間約一カ月。黒河で二、三日船積み作業をして、舟を連ねた橋を渡ってブラゴエンチンスクに着き、さらにここでも二、三日荷役作業をして、満州から持って来た高粱^{コリアン}等を貨車に積んだ。

奉天から黒河までは客車の車両があったが、ブラゴエからのシベリア鉄道は貨車で、中は二段になっていた。そして終着のノボイリンスク駅には十一月八日に到着したことになる。

奉天を出発してバイカル湖の東、終着のノボイリンスクまで四十二日を要したことになり、通常の運行では約一週間と思われる行程に四十余日を費やしたことは、身体的な衰弱と精神的な苦痛が大きく、抑留者の死亡が一九四五年の十月から翌